

外国人労働者30万人国外退去、シヨッピング・モールはがらがら

## それでも砂上の楼閣は「永遠に繁栄する」と強気のドバイ人

去年の夏前までドバイの新聞には毎日、厚さ2cmのチラシが2束ついてきた。ほとんどが不動産広告、それも多くがオフプラン物件（設計図段階の物件）の広告だ。だが、秋以降、量が減り、今は厚さ1cmのものが1束。最低20%以上建設済みでない物件の販売が禁止され、典型的な投機対象だったオフプラン物件の広告も姿を消した。

エジプトの金融機関によれば、現在、住宅価格は去年5月～6月のピーク時に比して34%も下落し、さらに20%ほど下落する可能性もある。

不動産バブル崩壊を受け、ドバイ政府は外国人労働者の「追放」に乗り出した。今年3月時点でドバイの人口は179万人。うち外国人が9

割近くを占めるが、6月までに30万人を帰国させる。ドバイでは解雇された外国人は1か月以内に国外退去しなければならぬが、不法滞在者が急増したため、政府は「出頭すれば罪は問わず、帰国の航空運賃も負担する」と呼び掛けている。特に対象になっているのが、数が増えすぎ、労働争議も起こしたインドなど南アジア系の労働者だ。



ドバイ沖の人工リゾート島「パーム・ジュメイラ」。デビッド・ベッカムを始め、世界のセレブがここに別荘を買った。ドバイ不動産バブルの象徴だ。

外国人労働者はその本国に帰ると、貴重な外貨獲得の戦力であるため、「追放」に反対する本国政府もある。例えば、今年4月、タイのパタヤでのASEANサミットが中止されると、フィリピンのアロヨ大統領は急遽ドバイに飛んだ。事前にUAEのガルフニューズ紙に「フィリピン人は依然UAEで最も求められる種類の労働者だ」と訴え、ドバイではフィリピン人労働者の会合に出席して励ました。

だが、まるで槌音が止んだかのような日本での報道とは裏腹に、建設現場は表面的には相変わらず活況を呈している。ドバイ沖に建設が予定されていた多くのリゾート島のうち、パーム・ジュベルアリアは計画が延期されたが、パーム・デイヤ、ザ・ワールドなどは工事が続いている。計画段階のものは見直され、延期されたが、すでに着工中のも

のが中止になったわけではない。「バブルは崩壊したが、市場が淘汰、正常化された。これ以上価格は下がらない」（現地の日系コンサルタント、ミラー・ジュ・グループ会長・福田一郎氏）という見方もある。もっとも去年の11月にオープンした世界一の店舗数1200を誇るドバイモールは昼

### 東京 ディカプリオが「ニシアラライ」と 叫んだマンシヨンCMのその後

「ニシアラライ」。スーツを着て大勢の聴衆の前で熱く叫ぶのは、あのハリウッドスター、ディカプリオ。一方、どこかセクシーな仕草と目線でマンシヨン名をささやくのはあのマドンナ——このほかにリチャード・ギアやジャン・レノ、日本人タレントもSMAPや黒木瞳、坂本龍一、渡辺謙が登場。いずれも2～5年前に、首都圏がミニバブルに沸いた時のマンシヨンのテレビCMだ。確かに東京はバブルだったのだ。

ちなみに、「ニシアラライ」は足立区の西新井。都心よりも埼玉県に近い。マドンナCMのマンシヨンが建つ有明は埋め立て地。いずれも、本人たちから受けるセレブなイメージとはかなり遠い場所。今思えば、相当、無理があった。だが、当時は右肩上がりのマンシヨンブーム。ギャラだけで数億